

10. セルヴァンテス

張慈慰氏が「婦人の智力を論ず」（『新報副刊』一四〇二）の文中にとても面白い話を引いておられる。

以前スペインに行った人があり、路上に破れて見る影もない着物を着た乞食のような人を見た。傍の人が彼に知らせた。これが Don Quixote を書いた Cervantes ですと。彼はスペイン政府が、このような偉大な詩人に対して、扶助もしないのはあまりに情理にかけ離れていると思った。だが彼の友人は彼に、ただスペイン政府が扶助しなかったがために、この詩人はこの偉大な著作を書けたのであって、でなければわれわれはこのような本を一冊も持たなかつただろうと言った。

上文は十一月二十三日の新聞に見え、わたしたちはまた十一月七日発行の『現代評論』第48期に、西澧氏の『閑話』にも似たような話を見る。

ある人がスペインに遊び、彼のガイドがある乞食のような老人を指差して、あれが Don Quixote を書いた Cervantes だと言った。聞いた人は驚いて、“セルヴァンテスですか。どうしてあなた方の政府は彼をこんな貧困のままにしておくのですか。”と言った。ガイドは、“もし政府が彼を養ったら、かれは Don Quixote のような作品を書かなかつたでしょう。”と。

わたしはこの話はとても面白いと思い、思わず考証癖などという馬鹿な考えを起し、その出典を探そうとし、そこで何種かのスペイン文学史と評論をひっくり返したが、どこにも見当たらない。後になって一冊『セルヴァンテス評伝』を見つけた。イギリスの『ドン・キホーテ』の訳者 Henry Edward Watts の著で、第十二章で Marquez Torres がこの話を記述したことに言及しているが、セルヴァンテスの名声が当時いかに大きかったかを見るにたる。一六一五年（セルヴァンテスはその時六十八歳であつて、次の年に彼は亡くなった、）二月二十五日、Torres はトレドの主教に付いてフランス特使への答訪に行ったが、随員の中のかかりの人がセルヴァンテスの著作の愛読者であつた。“彼らはこのように熱心に賛美したので、わたしは彼らのある場所に連れて行って、その作者に会うことができるようにしてやろうと言うと、彼らは是非にと願つた。彼の年、職業、身分と境遇を尋ねるので、わたしは彼は年取つていて、軍人で、紳士で、たいそう貧しいと答えるしかなかつた。そこである人は訊いた。しかしスペインはなぜ公金を使ってそういう人を援助し、豊かにしないのか、と。またある人はとても深刻に、もし貧窮が彼に著作をするよう迫るのなら、どうか神よ彼を豊かにしないでください、彼は自分が貧窮でも、その著作によって世界を豊かにできますから、と言つた。” James Fitzmaurice Kelly の精確な『セルヴァンテス伝』第十二節にもそのように言うから、たぶんこの叙述は当てになるのだろう。というのは Kelly はイギリス現在のスペイン文学の“権威”であるから。フランス人が本当にセルヴァンテスに会つたことがあると言う人もあるけれども、彼は信じていないようである。後の文で次のように言っているから。“もしそれらフランスの愛読者たちがほんとうに Torres にセルヴァンテスの家に案内させたのなら、彼らは周囲の状況から彼が本当に貧窮であつたことを見出しただろう。”彼は確かに貧乏であつた。一五九〇年十一月八日セルヴァンテスは四十円の布を買つた

めに、彼と彼の保証人とが生地屋と契約書を結び、おまけに四つの公証を中に立て、本当に伝中に言うように鄭重に公債を担保に尽くしたのであった。一六〇一年の冬、政府が彼に穴を開けた公金の返還を迫った時、彼はやはり“自分でもまだ衣食の資に事欠いた”ので、二度目の下獄をしたのである。彼の窮状は確かにありありと分かるが、どうやら彼が鶉百羽を懸けた真相はついに誰も見た人がないらしい。——むろん彼の親戚友人は見たのだが、諸記録には見えない。

『ドン・キホーテ』（全名は『ラマンチャの聡明な紳士キホーテ氏』）はわたしの好きな本の一つで、宣統以前に一度読んだことがあり、近十年余りは再読していないが、折に触れて繙くことは、何十回あったかしのれないから、これはわたしにとっては『水滸伝』よりも親しい。某“西儒”は、“一人の文人の著作の最もよい注釈は彼自身の生活である”と言った。だがセルヴァンテスにおいては又特にそうで、なぜならもう一人の“西儒”が言うように、“小説を著作する人がおり、小説を経験する人がいるが、セルヴァンテスはこの二者を兼ね備えている”から。もし『ドン・キホーテ』が好きなら、セルヴァンテスの伝記にもきっと興味を感じるだろう。彼の生活はもちろんとてロマンティックだが、現実的と言えども同時に非常に現実的である。彼はルネサンス期の人である。彼にはその偉大なところもあるが、また多くの過失もある。だがこれはわれわれにもっと彼を理解させてくれる。なぜならわれわれが求めるものは決して聖徒の奇跡の物語ではないからである。Kelly の一冊の簡潔で精密な小伝はほんとうに『五十の著名な逸事』よりももっと面白い。中に記されたものは全て確実な考証で、本の大半の脚注は全て基づいたスペイン語の文献の原本であるけれども。十冊の中国現代の水準以上の小説を読んでも、実に（スペイン語の部分を除いた）このような書の半冊を読むにも及ばない。民国十四年十二月五日。

※初出：1925年12月14日『語絲』第57期